岡山県立大きょう開学20周年記念式典

「知の拠点」へ飛躍を

地域に根差し信頼築く

開学20周年を迎えた岡山県立大。地域貢献やグローバルな人材育成に力を注ぐ

岡山県立大（総社市窪木）は今年、1993年4月の開学から20周年を迎えた。旧県立短大を母体に、保健福祉、情報工、デザインの3学部と大学院を設置。自治体や企業と連携しつつ、地域貢献とグローバル化を見据えた人材の育成に力を入れてきた。2日には同大で記念式典があり、地域の「知の拠点」を目指してさらなる飛躍を誓う。

（森元俊一朗）

古代山城・鬼ノ城を仰ぐ田園地帯に広がる県立大のキャンパス。3学部と大学院に約1860人が在籍する。

開学前は、総社市をはじめ、吉備高原都市を擁する旧賀陽・加茂川町、岡山市（西大寺地区）などが誘致合戦を展開。緑豊かで文化的な風土や交通の利便性、地元の熱意が決め手になったとされる。

総社商工会議所の清水男会頭(61)は当時、総社青年会議所理事長として署名運動を率先。「地域の発信力を高めるため、何としても誘致したかった」と振り返る。

保健福祉、情報工、デザインの3学部構成は、有識者委員会の答申を受けて県が決定。背景には、高齢化や情報化、潤いある生活文化に対するニーズの高まりがあり、同大事務局は「時代の要請だった」という。

シンクタンク

推薦入試枠を設けていることもあって学生の半数は県出身者。就職先も約5割を県内が占め、名実ともに地域に根差した大学であることがうかがえる。

それだけに、教育研究と並んで力を入れるのが地域への貢献だ。

市民参加型映画「鬼の城」を製作する総社市の官民プロジェクトに参画し、県内のスーパーと共同で弁当商品を開発。学生にとっても、学んだ知識や技術を実社会で試す機会となっている。

今年9月には、総社市、国際医療ボランティアAMDA（本部・岡山市）との間で、地震や豪雨災害の被災地を連携して支援する3者協定も結んだ。

総社市の片岡聡一市長は「県立大は総社のシンクタンクともいえる存在。自治体に欠けている学術、マンパワーを持っている」と期待を寄せる。同大2期生で、映画「鬼の城」の製作に携わったデザイン学部の斎藤美絵子講師(38)は「20年かけて地域とつながりを深め、信用を築くことができたのでは」と話す。

大学間競争は激化

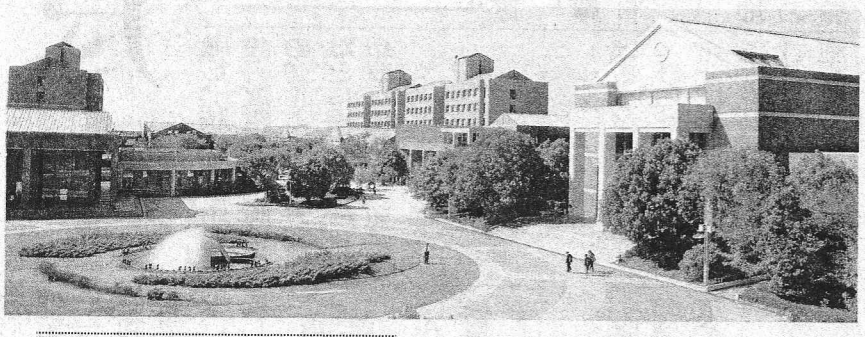
ただ、大学経営の厳しさは同大も例外ではない。少子化が進む一方で全国で大学新設の動きは続き、競争が激化。収入の多くを頼っている県の財政難も影を落とす。

2007年度に公立大学法人に衣替えしたのも、競争力を向上させるために運営の自主性を高め、迅速な意思決定を可能にする狙いがあった。教員研修を充実させて外部研究資金の獲得を促し、企業との共同研究仲介組織も強化するなどの対応策を打ち出してきた。

今春には9年ぶりにトップが交代し、辻英明氏(66)が理事長兼学長に就任。教養教育の充実に加え、語学・異文化理解力の向上をはじめとする国際化への対応を掲げ、カリキュラムの刷新や海外大学との交流拡大を模索する。

先行き不透明な時代にあって、自ら課題を見つけ、解決する力を備えた人材を地域に送り出せるか―。大学関係者には20周年の祝福ムードばかりでなく、正念場との危機感が漂う。

辻学長は「県立大は県民とともにある。もっと地域の期待に応えられる大学にならなければならない」と強調する。



岡山県立大の歩み

1989年	県が県立大の建設地を総社市窪木に決定
93年	県立大開学。保健福祉、情報工、デザイン学部と短期大学部設置
97年	大学院保健福祉学研究科、大学院情報系工学研究科設置
98年	大学院デザイン学研究科設置
2005年	地域共同研究機構設置
07年	短期大学部廃止。公立大学法人に移行